

本論文は英語の最古層をなす古英語 (Old English, 以降 OE) から初期中英語 (Middle English, ME) までの文献資料をもとに、名詞の曲用形が前置詞を伴わずに文中の副詞的修飾を行う現象 (格の副詞的用法) を調査・記述し、その用法が総合的言語から分析的言語への、英語史上の類型的変化の過程でどのように推移したのかを、格体系の複雑さと照らし合わせて明らかにすることを目的としている。

複雑な格体系を有した OE では、主格を除く全ての斜格が前置詞を伴わずに副詞的に機能した (副詞的格)。そのため、一つの名詞が副詞類として機能する場合には、属格、与格、対格、具格、および前置詞句という表現形式が存在し得たことになるが、これらの間の機能差やお互いの競合関係に関しては数えるほどしか先行研究が存在せず、またそれらも網羅的とは言えない。

OE の副詞的格を扱う先行研究では、副詞的格が次第に前置詞句に入れ替わるといふ、総合的言語から分析的言語への通時的変化に着目されることが多く、Kniezsa (1986)、Sato (2009b) などは OE 後期散文にかけて副詞的格の用例数が減少したことを指摘している。このような副詞的格の減少とそれに反比例する前置詞句の増大は、先行研究では総合的言語であった OE から、分析的、迂言的言語である ME への変化という、英語史における言語類型の変化と関連づけて解釈され、格の衰退に伴って副詞的格の機能が前置詞句に取って代わられたとされる (Kniezsa, 1986, p. 426; Lundskaer-Nielsen, 1993, p. 32; Sato, 2009b, p. 13)。

しかし、Sato (2009b) の調査結果からは、OE 散文の前期・後期という時期の違い以上に、分析対象の作品ごとの傾向の違いが大きいことがうかがわれる。実際、韻文と散文を単純に比較することはできないというのは多くの研究者の同意するところであるが、同じ散文でもテキストの種類の不均質性、オリジナルの作品と翻訳作品の相違、スタイルと方言差、テキストの年代の不確かさといった点を考慮すると、これが些細な問題でないことがわかると Lundskaer-Nielsen (1993, p. 32) は指摘している。したがって、OE における全般的傾向の把握を目的とするのであれば、可能な限り多くの作品を分析対象とすることが望ましいことがわかる。また、先行研究では、扱われている作品だけでなく、対象とされる語彙も一部の時間名詞に限定される傾向があったため、本研究は調査対象の語彙を増やした上で、OE 前期と後期からそれぞれ 5 つの散文作品と 2 つの韻文作品を対象とし、Dictionary of Old English Corpus を用いることによって可能な限り網羅的な調査を行うこととした。

この現象にまつわるもう一つの問題点は、先行研究では特に OE 後期にかけての時点を表す副詞的格の減少が格の衰退と関連しているとされているにも関わらず、現代英語においても前置詞を伴わない名詞句が副詞的に機能することである。特に、

OE 期にほとんど副詞的用法で表れなかった *morning* や *evening* のような名詞も頻繁に生起するという事実は、先行研究で指摘されているような格機能の衰退に伴う副詞的用法の減少という単純なシナリオでは説明できず、変化が一方向的ではなかったことがうかがえる。仮に OE 後期にかけて、副詞的格が減少していたのであれば、現代英語に見られるような副詞的名詞の用法は OE より後の段階で復活したことになる。

この研究上のギャップを埋めるため、本研究は格体系が変化の途上にあった、初期中英語 (EME) における名詞の副詞的用法の調査も行った。EME 期には時期や地域によりいまだにさまざまな段階の体系が見られたため、格の崩壊により副詞的名詞が前置詞句に取って代わられるという先行研究の主張を検討するのに適した資料であると考えられる。そのうえ、この時期の副詞的名詞を主な研究対象とした研究は存在しないため、OE の通時的調査と EME の調査結果を合わせることで、名詞の副詞的用法が格体系の変化とともにどのような変遷を辿ったのか明らかにすることができる。

本論文の構成は以下のとおりである。0 章で本論文の概要を述べた後に、1 章で研究の背景を説明する。1.1 節では OE と ME の言語系統、外面史を解説し、調査対象の作品がどのような時代背景に、どのような経緯で記録として残されることになったのかを明確にする。1.2 節では副詞的名詞の基本的情報を紹介したのち、1.3 節で上に述べた疑問提起を行う。

2 章では先行研究を概観する。2.1 節では通時的变化に着目する研究を紹介し、これまで副詞的格の通時的变化を調査する際にどのような文献を対象とされ、どのような手法が用いられていたのかを検討し、それらの問題点を明らかにする。2.2 節では格ごとの意味がどのように記述されてきたのかを紹介する。先行研究では、属格は文脈により継続、時点、反復を表し、与格・具格は時点、反復を、対格は継続を表すと一般的に記述されている。一部には継続を表す与格も存在すると言われるが、これはラテン語の影響によって説明される。このように時間的意味の記述の際には、時点・継続・反復という分類が用いられるものの、先行研究においてもしばしば同一の用例の時間的解釈が割れることがある。この時間的解釈に関わるアスペクト的問題にも言及し、動詞の意味や用いられる名詞、修飾語などを根拠に、先行研究で明確にされることのなかった時間解釈の基準を明確にする。先行研究に見られた手法上の問題を踏まえ、2.3 節では本研究での調査対象範囲を限定する。その際、先行研究では副詞的名詞の定義が明確に行われることがなかったため、しばしば副詞的用例に含められていたものの、実際には副詞的とみなすのが適切でないものとして、絶対用法、形容等の補語、属格複数形、慣習的意味を表すものを挙げ、これら进行分析から除外する旨を述べる。また、省略も網羅的に用例を収集することが困難であるため、分析対象から除外する。

3 章では OE の副詞的格の用法調査を行う。3.1 節では対象とする語彙、作品を指定し、用例収集の方法を述べる。分析対象には、前期散文からボエティウス著『哲学

の慰め』(Bo)、オロシウス著『異教徒に対する歴史』(Or)、グレゴリウス 1 世著『牧人の心得』(CP)、ベータ著『英国民教会史』(Bede)および『アングロ・サクソン年代記』A 写本 (ChronA (891 年までの項目))を、後期散文からエルフリッチのカトリック説教集 (ÆCHom)、エルフリッチの聖人伝集 (ÆLS)、『アングロ・サクソン年代記』E 写本 (ChronE (1080 年～1121 年の項目))、ウルフスタンの説教集 (WHom)、ウェスト・サクソン版『福音書』(WSCp)を含めることにより、なるべくさまざまなジャンルにわたるまとまった文献を調査することを試みる。3.2 節では収集された用例の分布を概観したのちに、3.3 節で前期散文、3.4 節で後期散文、3.5 節で韻文の用例を調査する。その際、それぞれの調査範囲での用例数の変化、頻繁に用いられる表現などを確認し、前期散文に含まれる Bede や ChronA という歴史書が極端に多くの用例を在証しており、見かけ上前記散文における用例数の増加率を極端に増やしていることを指摘する。しかし、こうした作品間の偏りを考慮に入れても特に時点を表す用法での副詞的格の減少が見られることを 3.6 節で確認する。

4 章では EME での副詞的名詞の用例を調査する。4.1 節では EME における副詞的名詞の用法を調査する際の分析対象として、ChronE の継続部分である Peterborough Chronicle First Continuation (PetC-1)および Second Continuation (1132～1154 の記事、PetC-2)、Layamon's Brut (Laya)の C 写本および O 写本、Ormulum (Orm)を用いることを述べ、これらの作品における格体系に関する先行研究をまとめる。Laya C が最も保守的な性格を保っているのに対し、PetC-2 はすでに大部分の格を失っており、Orm が最も革新的な言語体系を示すことを述べる。4.2 節では副詞的名詞がどのように用いられていたのかを、作品ごと、意味別にまとめる。調査の結果、形態的格をよく保っていた Laya C では時点を表す用例がほとんど見られない一方、形態的格の消失が進んでいた Laya O では用いられる語彙の多様性が増し、Orm ではその用例数が大幅に増大することを確認する。

5 章では総括として、OE 後期にかけて、特に時点を表す用法では副詞的格の用例が減少していたこと、初期 ME では格体系の複雑さと時点を表す副詞的機能が反比例の関係にあり、この事実からは無変化の時間名詞が副詞的に用いられるという変化は北から南にかけて進行した可能性があること、また、一部には Orm で初めて見られるタイプの副詞的名詞が存在することから、ModE に見られる副詞的名詞には OE から継続して用いられているものとは別のタイプのものが存在する可能性を指摘する。